

五ヶ瀬町三ヶ所採集の磨製石斧について

呼子 和友
（日向市教育委員会）

1 はじめに

今回紹介する磨製石斧は、国道 218 号五ヶ瀬高千穂道路整備事業に伴う樋口遺跡の発掘調査中に、発掘作業員によって持ち込まれたもので、現在、宮崎県埋蔵文化財センターに保管されている。この磨製石斧は、五ヶ瀬町三ヶ所の津花トンネルを五ヶ瀬側に出てすぐの北側にある採石場周辺において採集されたという（図 1）。

五ヶ瀬町は宮崎県の北西部に位置し、北側には祖母・傾山系、西から南には阿蘇外輪山や九州山地等の山々に囲まれた高地にある。基盤となる阿蘇溶結凝灰岩が大小の河川による侵食を受け急崖をなしている。町内の遺跡数は少ないものの、縄文時代の三ヶ所神社裏遺跡、古墳時代の広木野遺跡や広木野横穴墓等が知られている（五ヶ瀬町 1981）。また、津花峠一帯に蛇紋岩産地が分布し、三ヶ所神社周辺に蛇紋岩製石斧の製作遺跡が存在する可能性が指摘されている（藤木 2005b）。

2 資料紹介

完形の磨製石斧である（図 2、写真 1）。長さ 140 mm、厚さ 23 mm、幅 68 mm、重量 295.7g。細碎凝灰質砂岩製で、礫面は黄褐色、研磨面は灰色を呈す。両側縁には、対となる 3ヶ所の剥離①があり、台石と加撃具を用いた両極敲打技法によるものと考えられる。この成形時剥離面の突出部を含め、正面・裏面・側面の大部分が研磨により仕上げられている。裏面には礫面が残る。刃縁には研磨を切る剥離や潰れが認められ、使用に伴う痕跡②と見られる。なお、正面、裏面の一部には近年のものと見られる耕作具等による擦痕が見られる。

この磨製石斧の年代について、礫・分割礫を素材とする短冊形で刃部のみ研磨する例が多いという縄文時代早期の石斧の特徴（重留 2005）は見られず、一方で柿川内第Ⅰ遺跡（小林市野尻）、天神河内第Ⅰ遺跡（宮崎市田野）の縄文時代前期から中期の蛇紋岩製石斧に類例があり、後期の磨製石斧にも形状の近いものがある。以上から、およそ縄文時代前期から後期までの中で捉えることができる。

3 おわりに

五ヶ瀬町内では遺跡の発見数や発掘調査事例も少なく、今回紹介した磨製石斧は、当該地域の縄文時代の一様相を示す貴重な資料と言える。

なお、本稿の執筆にあたり、留野優兵・藤木聡・松田清孝（敬称略、五十音順）の各氏には資料調査や石材同定等で大変お世話になった。記して感謝を申し上げる。

引用・参考文献

五ヶ瀬町 1981『五ヶ瀬町史』

重留康宏 2005「宮崎県域における縄文早期の石斧概況」『石器原産地研究会会誌 Stone Sources』No.5、43～46頁

藤木 聡 2005a「宮崎県域における縄文時代の石斧製作と石材」『石器原産地研究会会誌 Stone Sources』No.5、47～56頁



図1 磨製石斧採集地点 (1/25000)



写真1 磨製石斧 (正面・裏面・刃部)

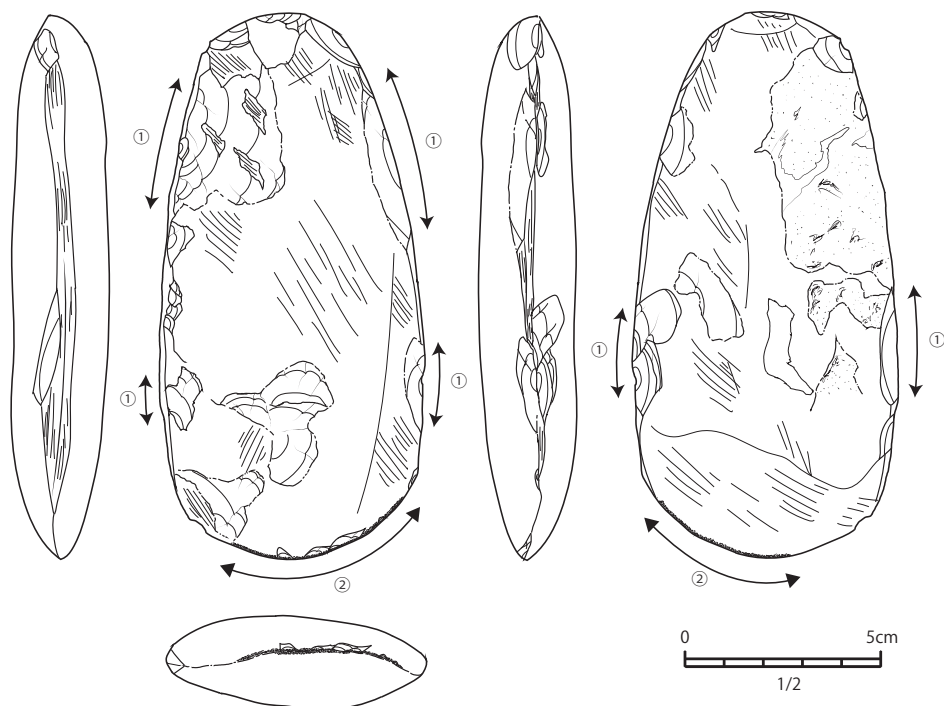


図2 磨製石斧実測図

藤木 聡 2005b 「宮崎県域における蛇紋岩製石斧」『石器原産地研究会会誌 Stone Sources』No.5、57～61頁

宮崎県教育委員会 1976 『柿川内第Ⅰ遺跡 柿川内第Ⅱ遺跡』

宮崎県教育委員会 1991 『天神河内第Ⅰ遺跡』

宮崎県埋蔵文化財センター 1997 『広木野遺跡・神殿遺跡A地区』

吉田政行 2004 「両極剥離技術と楔形石器」『石器づくりの実験考古学』石器技術研究会、学生社、94～109頁

図出典 図1：国土地理院地図を基に作成、図2：呼子作成、写真1：呼子撮影